

のは初ゆてである。四P目はこのルートの関門である。私のトップで登り出す。テラスからいきなり人工登攀でアブミの掛かえで登り出す。登るにつれて壁は除々に垂直になって行く様な気がする。時々半分位しかリスに入っていないハーケンが有るが静かに静かに登り、すばやくその上のピトンにカラビナを入れて、ホットする。下でぼんぼんとNがジーと見ている。高度感はずばらしい。ぼちぼちと滝谷にもクライユエやってきたらしく各壁に元気の良い掛声が響く。

三〇米登り不安定に石がつまった洞穴状のテラスに着く。三人を上げて五P目も私のトップで登り出す。でだしが少々悪いアブミトラバースが終えるとフリーで凹角に入る。二〇米を快適に登り登攀終了点のドームの頭に出る。IとNを上げドームの頭にて記念写真を取る。まだ八時四十分だ。三人にしては仲々良いタイムだ。天気は相変らず気持良く晴れていた。

### 前穂高岳東壁Dフェース田山ルート登攀

雨はすでに上高地から降っていた。入山の時雨が降っていると、いうことは実にイヤなものだ。雨にけむる穂高も気韻であるのだ。奥又白池畔にツェルトを張り明日の天気を心配する。翌日は雨が少し降っていたが、かまわず四峰に向ったものの取付でどしゃぶりになったので登攀は断念し、ふてくさって帰幕する。明日少しでも降ったら帰るとSに伝え、雨にべとべとにぬれたシュラフにもぐる。それでも夜になったら雨もやみ曇もちぎれ、星が輝き始めた。

ではないか。山で天候に恵まれることは幸せな事だ。これ以上のぜい沢はない。山で若い命が毎年多く消えて行くのもほとんどが天候である。

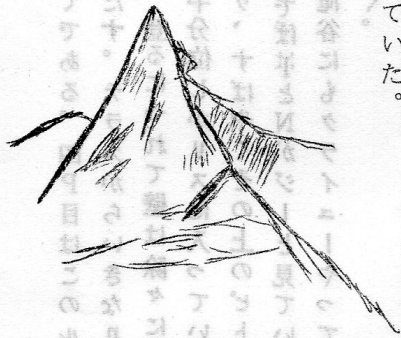
翌日、私とSは三時に起床した。外はまばゆいばかりの星である。四時池畔を出てB沢に向う。B沢の出合についたがまだ暗く頭上にはオリオン座が輝いている。B沢は暗くては少々悪いので夜明けを待つ。常念の頭が明るくなった頃再び出発してDフェース基部着六時。Dフェースも前から登りたいと思っていた壁であったがようやく今日実現するかもしれない。終ってみないと解らないがDフェースは悪いぞ、とパートナーのSにもうながす。私のトップで取付開始六時十分。取付はB沢のどんづまりから草付のバンドを三〇米右斜上するとDフェースを特徴づける二〇米のストラブに出る。このストラブは全く快適である。B沢をぼちぼち下からクライマーが登ってきたので落石は禁物である。私のトップで一P三〇米二P目スラグ三〇米とのばしテラスで軽く休憩。水がうまい。三P目はこの壁最悪のピッチだがまだ若いSがトップで行くというので行かせる。

Sが三P目を開始して頭上のコブの上に消えた時ちようど今日Dフェース第二番目のパーティーが取付く所であった。トップのSは「Gさん悪い悪い」と、ぼやいている。私はここから見た範囲ではそう悪く見えないので「早く登れ」と、どなる。Sは悪戦苦闘してどうにか洞穴テラスについたらしい。「登って良いよ」とコールしてきた。取付からハーケン連打のアブミの掛かえで私はおもむろに一本目のハーケンに乗った時、落石の音とともに下の方でズシューンというものすごい音がB沢に響いた。私ははっと

して下を見た時下から登ってきたパーティーのトップが二P目のスラグの所で落ちてドツベルのザイルに足がひっかかり宙づりになってしまった。墜落者のザックはすごい音でB沢を一気にゴロゴロと石とともにころがり落ちて行く。「ハーケンでも抜けたかな？」と、私は思った。救助に行きたいがここからではどうすることも出来ないのしばらくは同胞の墜落は見るに耐えない。もしハーケンが抜けたとしたら私達は運が良かった。七〇キロ級の二人も乗ったのでゆるんだかなどと一人苦笑する。三P目のこのピッチハング気味で悪く、さっきの事も有りものすごく慎重に登る。赤いポロボロの壁に打たれたピトンが今にも抜けるのではないか、などと実に心配だ。

Sの所まで来てさっきの話はSにはせず私はそのまま四P目を登り出す。ポロボロの草付まじりの壁を四〇米登り北尾根一・二峰間のリンネに出る。Sをリンネの中でもう一Pのぼしザイルを解き、リンネを登り、北尾根に出て前穂高岳の頂稜に立ち快活を叫ぶ。富士が見える程良い天気だった。そして、山は紅葉が始まろうとしていた。

一九七一年六月二十九日 完



俳句

巻線 落合

山ゆりの短かし命山の中

赤いバラそれ見て我は何思ふ

五月晴れ根雪を残す奥日光

五月雨の三百年の杉並木

石郎崎水平線も春がすみ

白糸の水辺をただようもみじかな

